

## M・ハイドンの高山右近劇《キリスト教徒のゆるぎなさ》——日本が促した再発見

野口秀夫

### 1. 高山右近の列福を祝い生涯を偲ぶ

犬輔：昨年 2017.2.7 にキリシタン大名・高山右近（1552-1615）がカトリックの「福者（ふくしゃ）」に認められたことを宣言する「列福（れっぷく）式」が大阪城ホールで開催されました。福者は「聖人」に次ぐ崇敬の対象で、右近は既に 2016.1 にフランシスコ教皇から承認されていました。列福式では、聖遺物として右近のチョッキの切れ端が壇上に置かれ、岡田武夫・東京大司教区大司教が福者の列に右近を加えるよう請願しました。教皇代理のアンジェロ・アマート教皇庁列聖省長官が、フランシスコ教皇の書簡を読み上げ、続けてイタリア語で「福者の列に加えます」と告げ、その後、長崎の信者で画家の三牧樺ず子（みまきかずこ）さんが今回の列福式のために描いた右近の肖像画（図 1）が除幕されたそうです。カトリック教会は、今後、高山右近が亡くなった 2 月 3 日を記念日として毎年祝うことになるといいます<sup>注1、注2</sup>。



図 1 高山右近像（三牧樺ず子・画）<sup>注3</sup>

教授：高山右近は、戦国時代から江戸時代初期にかけての武将、大名だ。キリシタン大名として知られており、洗礼名はユスト<sup>注4</sup>。父は摂津国の高山友照、洗礼名ダリヨ、母は洗礼名マリアだ。松永久秀、和田惟政、荒木村重、織田信長、豊臣秀吉に仕えた右近は人徳の人として知られ、多くの大名が彼の影響を受けてキリシタンとなった。父から受け継いだ摂津国高槻城を居城としていたが、秀吉から天正 13 年（1585）に播磨国明石郡に新たに領地を 6 万石与えられ、船上（ふなげ）城を居城とする。しかし天正 15 年（1587）、パテレン追放令が秀吉によって施行され、右近は信仰を守ることと引き換えに領地と財産をすべて捨てることを選んだ。その後の東の間、小西行長に庇護されて、小豆島や肥後国などに隠れ住むが、天正 16 年（1588）に前田利家に招かれて加賀国金沢に赴き、1 万 5,000 石の扶持を受けて暮らした。引き続き利家の嫡男・前田利長にも庇護を受けたが、慶長 19 年（1614）、徳川家康によるキリシタン国外追放令を受けて、人々の引きとめる中、右近は加賀を退去した。そして長崎から家族と共にマニラに送られる船に乗る。イエズス会報告や宣教師の報告で有名となっていた右近は、到着したマニラでスペインの総督ファン・デ・シルバラから大歓迎を受けた。しかし、船旅の疲れや慣れない気候のため右近はすぐに病を得て、翌年の 1 月 6 日（1615.2.3）に息を引き取った。享年 63。マニラ到着からわずか 40 日のことだった<sup>注5</sup>。

犬輔：高山右近と言えば高槻がゆかりの地として筆頭に数えられるけど、ぼくらの地元、明石の船上城についてはあまり知られていないので調べてみました。どうやら JR 明石駅の西、山陽電鉄の西新町の南西にある、明石警察署の西一帯が船上城推定地だそうです。警察新庁舎建設時に遺跡が発見され、以後 1981 年から 10 数次にわたって発掘調査がおこなわれてきたといえます。現在の地図上に船上城推定地を赤で囲んでみましょう（図 2）。

鳥代：わたしも興味があつたので明石を訪ねてみたの。先ず発掘品として瓦や壺が博物館にあるけれど<sup>注6</sup>、あまり実感は湧かなかつたわ。一方、現場は埋め戻されて、家が建ち、お城の規模を偲ぶよすがはなくなっているけれど、一か所、本丸の城址が残っているところがあるのよ。図 2<sup>注7</sup>の中央あたりで、現在は私有地になっている田んぼに数十センチの高さの小高い部分が残っているのが本丸跡（図 3<sup>注8</sup>）。そこには祠が建てられて（図 4<sup>注9</sup>）床下に「船上城址」と書かれた石碑が立っているというわ（図 5<sup>注10</sup>）。

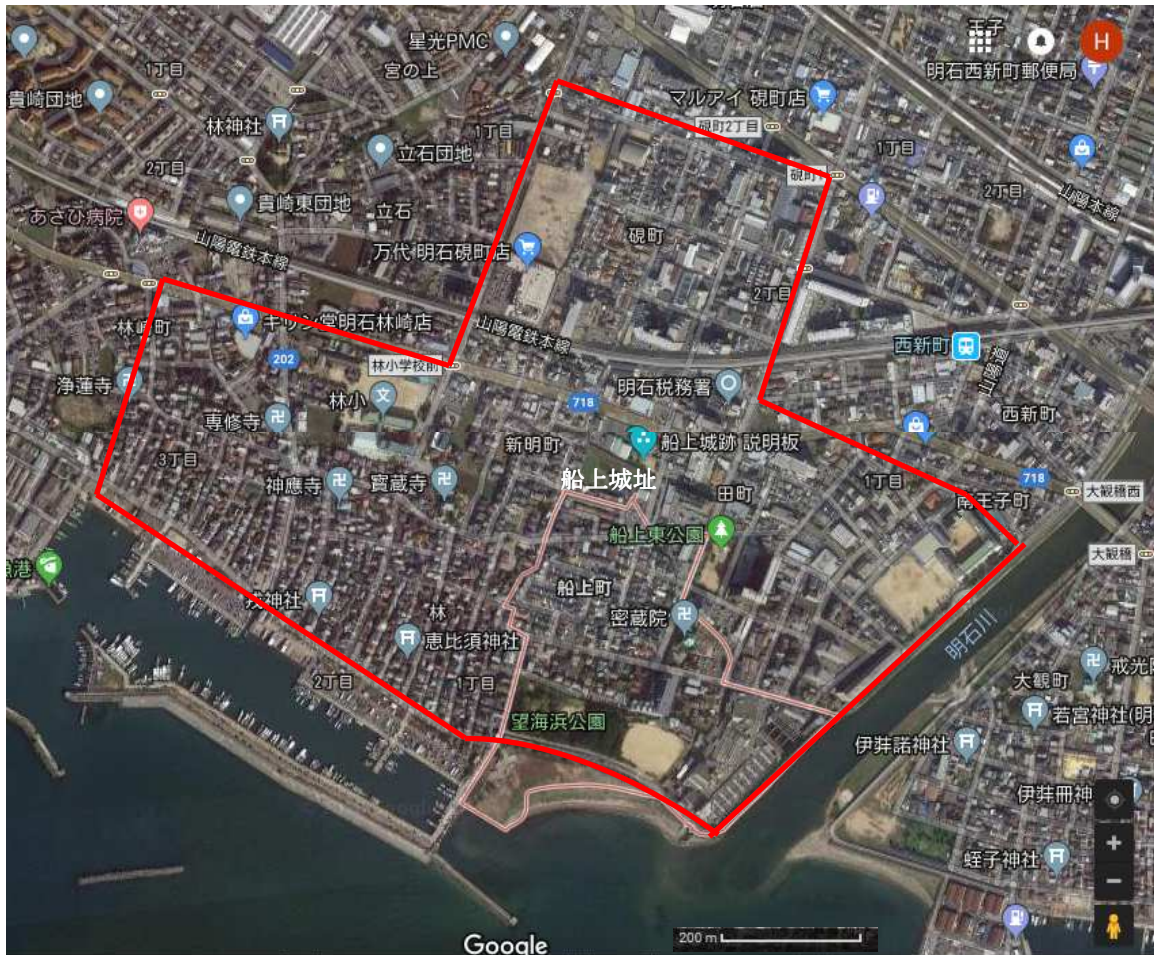


図 2 船上城推定地



図 3 船上城本丸跡伝承地 (ピストル型地形)



図 4 船上城本丸跡伝承地 (西から。北側の開渠は古城川)



図 5 船上城址石碑



## 2. M・ハイドンの伝記に記された高山右近劇

犬輔: ところで、高山右近を主人公にしたラテン語劇がモーツァルト時代のザルツブルクにあり、ミヒャエル・ハイドン Johann Michael Haydn (1737-1806) が作曲したということでしたね。

教授: M・ハイドンの伝記 (1952) の中でハンス・ヤンチークがこの劇を紹介している<sup>注11</sup>。

ハイドンの次の劇作品はエキゾチックな国、日本に関連する。悲劇《キリスト教徒のゆるぎなき Pietas christiana》は再びフローリアン・ライヒジグムント師 [ママ] により作られ、1770.8.31 と 1770.9.2 [正しくは 1770.9.4] に屋内円形劇場で上演され、日本の戦国英雄ティトゥス・ウコンドンの (誘惑に対抗する) キリスト教信仰のゆるぎなきを描いている。この悲劇にはドイツ語シナリオも用意されており、タイトルの「キリスト教徒のゆるぎなき」に導くべき——ラテン語に堪能でない——聴衆のより良い理解のために提供された。ドイツ語版は 1770 年に上演されたわけではない: ドラマ全編のドイツ語版は 1774 年作で、大司教ヒェロニムスが 1772 年にドイツ語の修了喜劇を命じたからであった。ドイツ語版《ゆるぎなきキリスト教徒ティトゥス Titus, der standhafte Christ》もまた 1774.8.31 と 1774.9.1 に大学のメインシアターで上演された。両版はプロローグが異なっている。両版には 2 部のパントマイムがあり、第 1 部 (1774 年のドイツ語版は「悲劇的ダンス」) では野営地で「キリスト教信条に対抗する魔術、地獄、怒り、そして死」などを示す; 第 2 部では——森と庭が場面の場所として記述され——「天によりキリスト教が勝利する」のを見る。疑いなくこのパントマイムは音楽付きであり、紛失してしまったものと思われる。一方で、第 2 幕と第 4 幕の合唱曲は残されており、両者とも 4 声の多声曲であり詩篇曲である: 最初の合唱 (第 2 幕第 1 場) はトヌス・ベレグリヌスで歌詞は「主に向かって幸せなしもべの歌を歌え Cantate Domino laeta pueri cantica」であり、ドイツ語版では「歌えや男ら、主に活気にあふれた喜びの歌を Singet, ihr Männer, dem Herrn ein munteres Freudenlied」である; 2 曲目の合唱 (第 4 幕第 2 場) は第 6 旋法の詩篇により歌詞は「鹿が噴水の泉を求めるように Sicut cervus ad fluentia cursitat」であり、ドイツ語版では「鹿が泉の流れを求めるように So, wie der Hirsch läuft schnaubend zu der Brunnenquell」である。合唱は歌手によって構成されたティトゥスの教会の会衆により歌われると台本にある。劇の中間部で合唱が歌われるという事実はイエズス会 [ベネディクト会も] の劇の音楽が、恐らく多くの場合音楽で幕が下ろされること、しかしまた時には音楽が劇の中間部を貫いていることを示している。[中略]

劇の概略構成を得るために場面を切り出してみよう:

1. 日本の英雄のいる森の入り口で大きな雲がある
2. すべて宮廷の第 1 幕
3. 寺院の第 2 幕
4. 無言の演技による地獄 (パントマイム第 1 部)
5. 庭の第 3 幕
6. 部屋の第 4 幕
7. 無言の演技による海域 (パントマイム第 2 部)
8. 皇帝の間の第 5 幕
9. 表彰式のための市街地

表彰状の授与とは学期の修了に上演されることを意味する。一方、ステージには多数の人が集められたに違いない。150 人も兵士が皇帝の警護のみに充てられているからである。パントマイムは宮廷舞踏教師がリハーサルした。

鳥代: どんな経緯で高山右近が取り上げられることになったのでしょうか。

教授: 意外なことかも知れないが、日本を題材とした劇は 1605 年から 1836 年にかけて全ヨーロッパで 160 件以上も上演されている。信長や秀吉のような武将・天下人が運命の変転に弄ばれる話であったり、キリシタン大名や沢山の庶民の殉教物語であったりした。また、劇の形式も、中世の宗教劇にならった錦絵芝居から、古典悲劇、バロックオペラと様々であった<sup>注12</sup>。1543 年フランシスコ・ザビエルの来日は、九州を主な拠点地域として、西日本一帯に一気にキリスト教化に成功する。高山右近は、当時、領土を拡大し禄高をあげ家来を持つことが、戦国時代を生きる武将たちの価値観である中、それらの価値観をすべて棄て、一生を信仰にささげ、追放された国外で没した。名誉はいらない、欲しいのは信仰の証だけと純粋に信仰を貫いた生き様は日本に殆どいない人物であると、宣教師たちは右近に注目したんだ。右近の名前は、イエズス会を通じて欧州に紹介され、人々の尊敬の対象となり、イエズス会劇に取り上げられ、オペラの題材となり舞台上で登場してくる<sup>注13</sup>。

鳥代: ザルツブルクはベネディクト会派だけれど、同様の動きがあったのね<sup>注14</sup>。右近から 200 年経ってもまだ新作の右近劇が上演されたなんて、興味深いわ。

教授: さて、ヤンチークの伝記のあと M・ハイドンの作品は、どこかにしまい込まれてしまったようである。その再発見を促したのが、日本在住のカトリック研究者や音楽研究者であった。彼らがこの右近劇を知ろうとして、どのように努力し、また研究の進展にどのように貢献したかについて詳しく調べてみることを勧める。作品の鑑賞はそのあとだ。

### 3. 日本から促した高山右近劇の再発見

犬輔：右近劇の研究はスイスの中央部に位置するシュヴィーツに生まれたトーマス・インモース Thomas Immoos (1918–2001) が、スイスにおける「日本人」劇上演に関する本を読み、そこにたまたま記載されていた『ユストゥス・ウコンドヌス Justus Ucondonus』という劇(1682年にルツェルンのイエズス会学院で上演)に目がとまったことが端緒のようだ<sup>注15</sup>。その本には、19世紀中頃のスイスでは日本に市場を求めて江戸幕府へ使節団が派遣され、多くの「日本人」劇が作られ上演された記録が残っていると書いてあったという。インモースは1951年布教のため宣教師として日本にやって来て、その後も調査を継続していたところ、「ウコン」劇にミヒャエル・ハイドンが曲を付けたオペラ [ママ]『ティトゥス』があることを知ったという。そこで在欧の知人や図書館などに手紙を書き、やっとのことで「台本はあるにはあるが、楽譜の方はせいぜい合唱曲が数曲残っているだけ」とまでは分かったけど、「それ以上調べようという人がむこうにいなかった」というところで一旦ストップしたんだそうだ<sup>注16</sup>。

鳥代：1965年頃、宗教哲学者として上智大学教授となっていたインモースは、当時日本モーツァルト協会会長であった属啓成(さっかけいせい 1902–94)がオーストリアへ行く予定と聞き、この話をしたところ、初耳だった属は非常に興味をもってくれたというのね。

犬輔：そして『ティトゥス』のラテン語とドイツ語両語による完全な台本が送られてきて、読むことができたというんだ。

鳥代：1969年にインモースは自ら、ザルツブルクへ楽譜を探しに行くのね。そこでゲルハルト・クロル Gerhard Croll (1927–) から聖ペテロ大修道院の書庫に作曲家たちの未発表の楽譜が10箱もあると聞き、調査結果への期待を胸に帰国したというわ。やがてクロルから属経由で第一報が入り、「ハイドンオペラの中の二つの合唱曲が発見された。他の部分もあるらしいが、確認にはまだ手間がかかる」との報告を受けたのよ。

犬輔：属自身は1969年にこう書いている。「このような珍しい古書を所蔵する図書館でもクロル教授も、内容にはあまり理解も関心もなかった様子であったが、クロル教授はその後大学の助手たちを動員して聖ペーター修道院の図書館から、この劇の中で歌われる二曲の合唱曲のパート譜を発見し、親切にもそれから総譜を作成してコピーを送ってくれた。それは第2幕と第4幕で将軍一家 [ママ] が歌う四重唱曲で、オーボエ2本、ホルン2本、弦四部のオーケストラと、オルガンのバツ・コンティヌオの伴奏がついている」<sup>注17</sup>。

教授：そして1975.4.25に日本モーツァルト協会例会でこの2曲の合唱曲が演奏された<sup>注18</sup>。

#### M. Haydn

合唱曲2曲「信念の切支丹(高山右近劇)」中より Zwei Chöre Aus “Ukondon, der standhafte Christ”

a) 歌えや男ら主に(この喜びを) Singtet ihr Männer dem Herrn

b) 鹿が(泉を求めて) 走るように So wie der Hirsch läuft

浜田徳昭指揮、東京都民合唱団、ソチエタ・バロッカ

鳥代：属は会報にこう解説しているわ。

2曲の合唱曲というのは、日本の武将、高山右近を主人公にした切支丹悲劇「信念の切支丹ウコンドン」の中で右近一族によって歌われたもので、1770年にラテン語で出版され、1775年[正しくは1774年]にはドイツ語訳が出版になってザルツブルクで同年8月31日から9月にかけて何回も[じっさいには1770年と1774年にそれぞれ2回ずつ]上演されました。この作品はモーツァルトとは直接関係はありませんが、この年[1773年9月末]にはモーツァルトはウィーンの旅行から帰って来て、[1774年]12月に新作オペラ「恋ゆえの女庭師」K.196上演のためにミュンヘンに出かけるまでザルツブルクにおりましたから、この劇[ドイツ語上演]を見たことは大いに考えられます。ザルツブルクは小さな町だし、この劇は町をあげてのセンセーションでしたから、モーツァルトが見なかったとしたらむしろ不思議でしょう。もう少し詳しい解説は会場で申し上げます[口頭の解説は今となっては参照できない]。

犬輔：会報編集者による解説もありますね。

今回のプログラムで、高山右近劇中の合唱曲が、日本ではじめてとり上げられるのはうれしい。18世紀に日本人を主人公とした劇がヨーロッパでつくられ、しかもその中に、モーツァルトと親交のあったミヒャエル・ハイドン作曲の合唱があるということは、実に興味深い。この劇の主人公はウコンドンということから、ヨーロッパにも知られた切支丹大名の高山右近がそのイメージとなっていることは疑いないが、実際の右近の事蹟とは程遠い。霊名にしても高山右近はジュストであるが、ここではティトゥス・ウコンドンとなっている。また登場人物もショーグンサマ、ヤクイン(施薬院、秀吉に仕えた施薬院全宗のことか)のように史実の反映がみられるもの、ゴモルドンなど誰とも分からぬもの、またシャルンガ、クシャンガなど日本人と縁のない名前も多く混ざっているのも面白い。そして一小諸侯であった高山右近はここでは将軍

につく重臣としてあらわれる。たゞ、高山右近および、日本に残る途をえらばず、夫と国外追放の行をともにした右近の妻ジュリア（劇ではクララ）の殉教精神が、ヨーロッパ人の心にかに強く印象づけられていたかは、この劇にもよくあらわれているように思う。いずれどこかでこの劇そのものが上演されることを期待したい。

教授：次に話題になるのは1996年開催の「ザルツブルクのモーツァルト展」だ。出品番号136号として、「フローリアーン・ライヒジューゲル師（ベネディクト会）『ゆるぎないキリスト教徒ティトゥス』音楽はミヒャエル・ハイドンによる P. Florian Reichsigl OSB: Titus / der / standhafte Christ, / Die Musik ist von Michael Haydn（聖ペテロ大修道院蔵）[展覧会型録翻訳のまま]」が展示された<sup>19</sup>。私も見たがガラスケースの中の表紙が読めるだけであった。ドイツ語版の台本であって、楽譜は含まれてはいない。因みにフローリアーン・ライヒスジューゲル師 P. Florian Reichssiegel (1735–1793) は聖ペテロ大修道院の神父であった（綴りは各種ある）。

犬輔：OSBを「ベネディクト会」と訳してはいますが、何の略ですか。

教授：ラテン語 Ordo Sancti Benedicti の頭字語だ。

鳥代：なぜオリジナルのラテン語版でなく再演のドイツ語版が展覧会に来たのでしょうか。

教授：「ザルツブルク聖ペテロ ベネディクト修道院の公開本(1419-1856)」のフローリアーン・ライヒジューゲルの項には23件の書物があるが、本作品は14番目に Titus, der standhafte Christ, Trauerspiel in Jamben. Salzburg 1774, 63 S. 8<sup>o</sup>.とあるのみである<sup>20</sup>。すなわち最終版としてのドイツ語版だけが公開されており、ラテン語版は非公開としているのではないだろうか。

鳥代：Jamben とは何のことですか。

教授：アイアンブ Jambus (Jamben は複数形) は短長格のことを言う。その反対は、トロキエ Trochäus (強弱格、長短格) である。また、韻律としては12音節の6押韻で構成された詩行であり、対脚韻をなしている<sup>21</sup>。

犬輔：現在は逆にラテン語版の方だけが Web で閲覧でき<sup>22</sup>、書誌目録では Pietas christiana, seu Titus: Tragödia in jambis. 4. Salisb. 1770.となっている<sup>23</sup>。ラテン語版もアイアンブの構成なんだね。ただし、ドイツ語版と異なり脚韻を踏んではない。

教授：ドイツ語版には属啓成による和訳がある。『ティトゥス・ウコンドン——信念のキリシタン——』(1976) だ<sup>24</sup>。属は「わたしは独訳の方で読んだが、すべて二行ずつの韻をふんだ古文で、辞書にもない古語もちらほら、スペルも現代語とちがうのが多いので、すらすら読めた代物ではない」と述懐している<sup>25</sup>。

鳥代：新訳もあります。デトレフ・シャウヴェッカー校閲／嶋田宏司訳『キリスト教信仰における不屈の情熱——F・ライヒスジューゲル（脚本）およびM・ハイドン（音楽）による日本を舞台とした劇。高山右近と豊後のティトゥスについてのイエズス会演劇レパートリーにもとづく1774年上演のザルツブルク・ベネディクト会演劇——』(2004/2005) です<sup>26</sup>。

犬輔：あっ、日本語訳による上演記録が出てきた。2002.12.1に京都府船井郡日吉町の郷土資料館で日本初演されている。シャウヴェッカーの企画・制作、嶋田宏司の訳による音楽付演劇『ティトゥス右近殿』であり、M・ハイドンの曲も演奏されている。

鳥代：それは全幕省略なしの上演だったのでしょうか。

教授：いや、日本語上演は1時間程度の短縮版で上演されたんだ。諸君たちも今から鑑賞することができる。初演から15年経ち、やっとビデオが Youtube にアップされたのだ<sup>27</sup>。

犬輔/鳥代：貴重な映像ですからゆっくりと鑑賞させていただきます。

#### 4. 悲劇《キリスト教徒のゆるぎなさ》の背景・特徴

教授：ここからは作品の背景・特徴について調べてもらおう。

犬輔：それでは、ヨハンナ・ゼーニグルの『ヨハン・ミヒャエル・ハイドン：ザルツブルクの舞台のための作曲——初めての概観』<sup>28</sup> から紹介しよう。ザルツブルクでは大学の修了表彰授与式に大学大劇場でラテン語の劇作品を学生たちが上演する習わしだった。上演には4~5時間もかかったというよ。

鳥代：そういえば、エーベルリーン作曲のラテン語の学校劇《ハンガリー王ジギスムント Sigismundus Hungariae Rex》も1761.9.1/3に大学の修了式で上演されたのね。5歳のモーツァルトがエキストラのひとりとして出演したというわ。

犬輔：モーツァルトの曲ではラテン語劇《アポロとヒアチントゥス Apollo et Hyacinthus》 K.38 が大学で上演されているけど1767.5.13だから修了式ではないんだね。また、宗教的ジグシュピール《第1戒律の責務 Die Schuldigkeit des ersten Gebots》 K.35 は大学ではなく、大司教宮殿の騎士の間で1767.3.12に上演されたものなんだ。

教授：M・ハイドンとベネディクト会のライヒスジーゲル師が初期に独占的に書いた「ピエタス劇」もじっさいには修了表彰授与式を想定したものではなかった。『敵対者のゆるぎなき Pietas in hostem』とパントマイム《夢 Der Traum》(1767)、『夫婦のゆるぎなき Pietas coniugalis』とジングシュピール《アルプスの牧場の婚礼 Die Hochzeit auf der Alm》(1768)、『悪漢のゆるぎなき Pietas in impium』とジングシュピール《自然の真実 Die Wahrheit der Natur》(1769)などの組み合わせで、音楽は後者のみに書かれた。それが、1769年末にライヒスジーゲルが「喜劇の長 Pater comicus」に就任すると「ピエタス劇」の性格や範囲が変化したんだ。表彰授与を伴う終了喜劇としての幕間劇は縮小され、より多くの音楽部分が必要となった。例えばラテン語の献辞、パントマイム、合唱と劇音楽が主たる位置を占めることになる。

犬輔：その第1弾が《キリスト教徒のゆるぎなき Pietas christiana》(1770)であり、続いて翌年の《愛国者のゆるぎなき Pietas in patriam》(1771)なんですね。両者は作者自身のドイツ語訳で《ゆるぎなきキリスト教徒ティトゥス Titus, der standhafte Christ》(1774)、《祖国愛の模範ヘルマン Hermann, ein Beispiel der Liebe zum Vaterlande》(1773)としても上演される。

鳥代：ところで pietas というのは「哀れみ」「慈悲」という意味ですよ。それがなぜ「ゆるぎなき」という訳になるのですか。

教授：Pieta が「哀れみ」「慈悲」というのはイタリア語の場合だ。ラテン語の pietas は主に宗教に使われて「穏やかな態度、崇高な崇拝の姿勢」を表す<sup>29</sup>。

犬輔：ではラテン語版《キリスト教徒のゆるぎなき Pietas christiana》の台本を見てみよう。今まで日本ではドイツ語版ばかりが紹介されているけど、M・ハイドンが曲を付けたラテン語版を中心にみていくべきですね。先ず表紙(図6、7)だ。

鳥代：作者名は書かれていないんですね。

教授：作者名の同定は前述の聖ペトロ大修道院記録だけが頼りなのだ<sup>30</sup>。

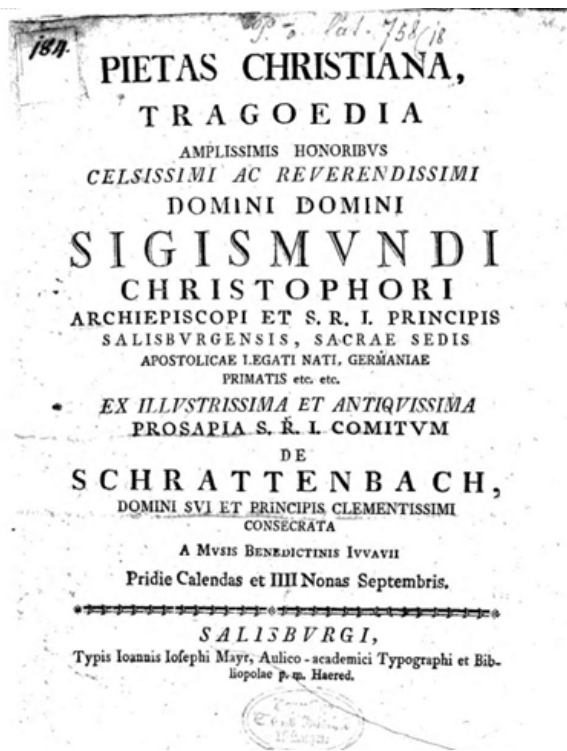


図6 《キリスト教徒のゆるぎなき》台本表紙

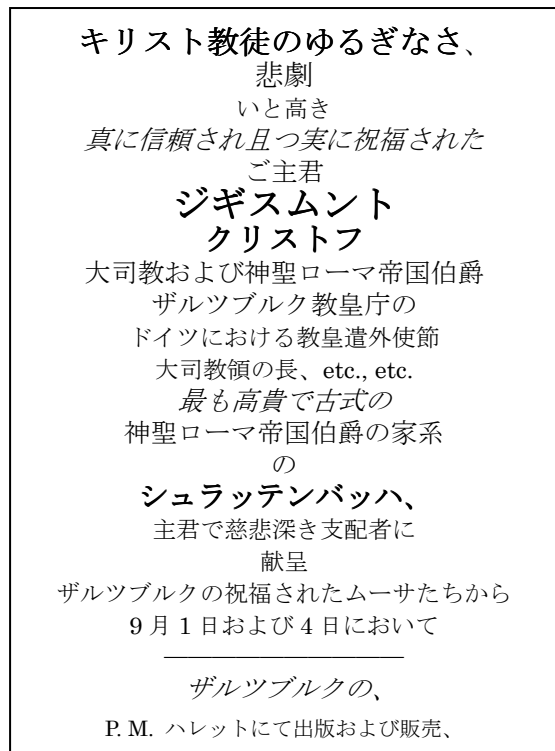


図7 《キリスト教徒のゆるぎなき》台本表紙(邦訳)

鳥代：Tragoedia は悲劇ということですが、先ほど終了喜劇という紹介もされました。

教授：実態は“悲喜劇 Tragicomedy”だ。悲劇的雰囲気の中で破局へ向う予想を与えておき、それが逆転して明るい結末に終る構成をとる。しかし台本には“悲劇”とだけ書いておいた方が読者にとって結末での意外な効果が増すという訳だ。

犬輔：S.R.I. は Sacrum Romanum Imperium の略で神聖ローマ帝国のことだと分かるのですが、IVVAVII というのは何故ザルツブルクと訳せるんですか。

鳥代：現代綴りではvの内のいくつかをuに置き換えるでしょうし、iはjかも知れないわね。

教授：そうだ。IVVAVII は Iuvavii のことで Iuvavum の属格である。ケルト起源の単語で、後のザルツブルクのことだ。ケルトの定住は紀元前15年頃だった。その後ローマ人が占領する。クラウディウス皇帝の下で、Iuvavum は経済的、文化的な全盛期を経験した。171

年に Iuvavum はゲルマン侵略者によって完全に破壊され、数十年後に部分的に再建された。国境付近のゲルマン族の侵略が絶え間なく懸念されながら、コンスタンティヌス大帝の下で最後の開花を経験した。その後 Iuvavum の住民は防御の良い高地に退却している。696年には聖ペテロ修道院、ノンベルク修道院、ザルツブルク教区が設置された<sup>注31</sup>。現代では Juvavia と綴っているようだ。

犬輔：表紙を開くと、梗概が書かれています。

#### 梗概

杉の木がどのくらい高く成長していくか、観察のために目印が刻まれるのと同様に、高貴な日本人ティトゥス右近殿は、勇敢さや戦術より、キリスト教徒としてのゆるぎない熱意が十分にその特徴を示す。彼は帝王の反抗的な兄弟を征伐し、戦場から都市ミヤコへ勝利の帰還の後、すべての甘言や脅迫的言葉を無視し、少なくともキリスト教の教義、あるいは彼が帝王に誓った忠実さから逸脱するくらいなら、妻とその息子を、そして自らの人生を危険にさらす、というゆるぎない決断を下した。実に愛は帝王に対してと同様、神に対してもゆるぎなく不動のものであった。

ハザート『日本教会史』第V部 第xx章<sup>注32</sup>

舞台は日本の首都・居城都市ミヤコ。事件は朝に始まり、夕方まで続く。

「ミヤコ」はラテン語版で Meaci、ドイツ語版で Meakon です。フロイスの『日本史』に「ミヤコ地方」という表現が出てくるので、それに準じた訳としました。

鳥代：劇が三一致の法則で書かれていることが分かりますね。《フィガロの結婚》もそうでした。

犬輔：次に大司教ジギスメントへの献呈の部分です。メルクールとアポロのレチタティーヴォとアリアで構成されています。但し楽曲は紛失してしまったようです。

#### 献呈

メルクールのアリア（アルト）[レチタティーヴォの訳は割愛]：

これは愛の記念碑、ジギスメントが示すのは。  
これは永続的な文書、愛する者が説くのは。  
愛は彼を愛する者に戻される：今喜んで知ることを助ける、  
愛とは何かを、好意とは何かを  
それらが息づくとき、閣下は不滅となる。

アポロのアリア（テノール）[レチタティーヴォの訳は割愛]：

真の賢明さ 無知からでなく、単なる知恵からでもなく、  
その両方が生む：我々は何者であるかと問い、  
それを知っているかと問えば、彼は宇宙を示す。  
これらは無知から、知恵者への成長を望む、  
閣下！ 思い出させ！ 安寧な土地のために  
多産な芸術が、ミネルヴァによってもたらされることを。

鳥代：献呈部分があるのはラテン語版だけなのね。貴重だわ。

犬輔：続いて各幕の説明です。ヤンチークが紹介していた既出のドイツ語版と微妙に違います。

第1幕：ティトゥス右近殿の忠実さに対する皇帝の感性

場面：宮廷

第2幕：右近殿に対する敵たちの密かな畏

場面：寺院

第3幕：ティトゥス右近殿に対する民衆の憎悪

場面：庭園

第4幕：ティトゥス右近殿の寛大なゆるぎなさ

場面：居室

第5幕：ティトゥス右近殿の勝利

場面：広間

#### 舞踊と演劇

第1部：キリスト教が攻撃され偶像崇拜にとって替わられる。

場面：偶像崇拜の町、キリスト教に反対する陣営

第2部：キリスト教徒の信仰心が偶像崇拜者の魔手を天の助けにより成功裏に取り除く

場面：森、阿弥陀堂と牢屋の場。舞台転換し庭の場

鳥代：「舞踊と演劇」が終幕の後にまとめて置かれているのがラテン語版の特徴ですね。ドイツ語版では幕間に置かれているとのことでした。

犬輔：次は登場人物の紹介です。面白いことに善玉と悪玉が対比されてます。

<b>登場人物：演者</b>	
<b>日本のキリスト教徒たち</b>	
<b>ティトウス・ウコンドヌス</b> [ドイツ語版ではティトウス・ウコンドン]、地域の軍司令官：秀でた且つ堪能な D. フランツ・デ・パウラ・ナウマイア、法律学履修生。	
<b>マルティアリス</b> [ドイツ語版ではマルティアル]、長子：きわめて高貴なタッデウス・デ・アントレッター、神聖ローマ帝国騎士、統語学学生。	
<b>マッテウス</b> 、第二子：きわめて高貴なカイエターン・デ・アントレッター、神聖ローマ帝国騎士、初学年学生。	
<b>シモン</b> 、末子：きわめて高貴なレーオポルト・ジギスムンドス・エンク・デ・ブルク、初学年学生。	
<b>クララ</b> 、ティトウスの妻：クサーヴァリウス・リーガー、統語学学生。	
<b>クシャンガ</b> 、司令官：テオダトウス・タルーイーザー、修辞学。	
<b>キリスト教徒ティトウスの家族</b>	
<b>日本の偶像崇拝者たち</b>	
<b>ショウグンサマ</b> (将軍様)、皇帝：秀でた且つ堪能な D. ヤーコブス・シェーラー、法律学履修生。	
<b>モロドヌス</b> [ドイツ語版ではモロドン]、皇帝の友人：秀でた且つ堪能な D. ヨアンネス・ハンター、法律学履修生。	
<b>ゴモルドヌス</b> [ドイツ語版ではゴモルドン]、護衛長：秀でた且つ堪能な D. ヨアンネス・エヴァンゲリオン・ヴォルフハルトシュテッター、法典学履修者。	
<b>ヤクイヌス</b> [ドイツ語版ではヤクイン]、医者：秀でた且つ堪能な D. アントニウス・ベルンシュティッヒ、法律学履修生且つ哲学マギスター。	
<b>シャルンガ</b> 、祭司長ポンティウス：秀でた且つ博識の D. ヨーゼフ・フランツ・フォルシュナー、法律学履修者且つ哲学学士。	
<b>ツミコンドヌス</b> [ドイツ語版ではツミコンドン]、クララの兄：秀でた且つ博識の D. ヨーゼフ・ブルッカー、法律学履修者且つ哲学学士。	
<b>イエモンドヌス</b> [ドイツ語版ではイエモンドン]、廷臣：ヨーゼフ・フォーゲルライター、修辞学者。	
<b>近衛兵集団。兵士</b> [ドイツ語版では主君の衛兵一人と 150 名の兵士]。	

鳥代：最後のところの兵士の数は 1774 年の上演規模を彷彿とさせるわね。

犬輔：モロドヌスは毛利元就 (1497-1571) を、シャルンガは日乗朝山 (にちじょうちょうざん ?-1577) を反映しているとする説もあるけど、微妙に時代がずれているよ<sup>33</sup>。

鳥代：イエモンドヌスは伊右衛門殿でしょう？

犬輔：今では緑茶の名前ですよ。

鳥代：ところで、演者名に “D.” が付されているのは何なのでしょう。

教授：“D.”はドミヌス Dominus のことで“Dom”(ドム)と縮約することもある。一般にはローマ教会の司祭への栄誉の接頭語として用いられているが、特にベネディクト会その他の修道会のメンバーにも用いられる<sup>34</sup>。ここでは当然後者の意味だ。

鳥代：モーツァルトがセレナーデ K.185 を贈ったアントレッター家の兄弟には “D.” が付いていないわね。ベネディクト会に入っていないということ？

教授：区別しているからにはそうなのだろうが、私は信徒でないので断定はできないね。

犬輔：音楽関係者の紹介が続きます。

<b>音楽作者</b>	
崇高で、立派な且つ徳の高い D. ミヒャエル・ハイドン、音楽の調和者、教師、及び大司教付き強力なホール・室内楽団管理者。	
<b>献呈関連</b>	
<b>アポロ</b> ：秀でた且つ堪能な D. マティアス・シュタードラー、音楽ホール・音楽大学歌手	
<b>メルクール</b> ：ヨアンネス・エルンスト、統語学学生。	
キュクロープス (卓越した鍛冶技術を持つギリシャ神話の単眼の巨人) の時代	
<b>(古代ローマの) サリイ</b>	
いと高く尊敬すべき大司教にして神聖ローマ帝国伯爵の ザルツブルクの若者たち	
[11 人の歌手のリストが続く]	
<b>劇内舞踊</b> ：崇高で且つ立派な D. シリル・ホフマン、宮廷客員芸術教授	
クリスチャン。ポンティウス。家族。	
シーンは、劇場設備の残りの部分を与える	
U.I.O.G.D.	

鳥代：最後の U.I.O.G.D.は何でしょう。



教授：Ut In Omnibus Glorificetur Dei、すなわち“神様が神様として、他の何ものからも完全に区別されますように”という意味で、普通「すべてのなかで神が崇められますように」と訳す。

犬輔：ここから劇の第 1 幕になるのだけど、ラテン語会話の翻訳は手に余ります。雰囲気味わうだけの目的で、初めの部分を紹介しよう。

### 第 1 幕 中庭

ティトゥス・ウコンドゥヌスの忠誠。

#### 第 1 場

(ティトゥス・ウコンドゥヌスは戦場から凱旋の軍隊と共に宮廷に伺候するために急遽入城する)

ショーグンサマ、ティトゥス・ウコンドゥヌス、モロドゥヌス、イエモンドゥヌス、ゴモルドゥヌス、クシャンガ

ティトゥス：無敵のショーグンサマ！ ことごとく焼き払ってまいりました！（兵士たちが声を合わせて帰還する）

ショーグンサマ：友よ！ ショーグンサマは話を聞きたい：家来ともども近こう寄れ！

ティトゥス：皇帝様の御意のままに！ 召使のこの上なき喜び。

ショーグンサマ：お前は召使ではなく友人であり大名だ。じっさいには、お前の能力と忠義に対する報酬は充分とは言えないが。

ティトゥス：私は聖なる忠誠以上のことはしておりません。これは私の果たした義務です。ただいま私の戦力に関連するお褒めの言葉を頂戴いたしました。皇帝様の意図やご満足からは程遠いものです。神の恵みがもたらされたことに感謝します。神は星 [= 運命] の強力な主であり、地の恐怖を抑制します。この方も勝者を助け、あるいはヤシの木を刈り取りました。そして敵は足枷をはめられ敗北を嘆きました。

教授：翻訳に無理をしないでよろしい。できる範囲でいいから楽しみなさい。

犬輔：はい、気が楽になりました。ではこの後、音楽に関するところだけを訳してみます。

第 1 幕 第 2 場最後の注釈  
護衛の軍楽隊と共に退場。

鳥代：この曲は紛失してしまったのね。

犬輔：次の曲が一つ目の合唱曲だ。導入部から訳してみよう。

### 第 2 幕 寺院

ウコンドゥヌスを畏にかける敵の暗躍

#### 第 1 場

ティトゥスは妻クララ、3 人の息子マルティアリス、マッテウス、シモンそしてキリスト教会の人々と寺院にいる。彼は皆に、帝王が彼に示した好意への感謝を込め、神への讃歌を歌うよう説教した：

ティトゥス：主に向かって歌え、父なる神の永遠なることを、勝利はかの御手が私にもたらす。汝ら、息子たちよ、内容とその理解を忘れるな、言葉こそ汝らの心に留まるにふさわしい。汝ら、キリスト教徒よ！ 主の恩恵を讃えよう！

ティトゥスの家族はさすらいの旋法（トーマス・ペレグリヌス）で讃歌を歌う。

鳥代：「さすらいの旋法」で作曲するようにと台本に書いてあったとは驚きだわ。M・ハイドンが選んだ旋法ではなかったのね。

犬輔：ちょっと待ってください。ドイツ語版の邦訳では「異国の調べ」<sup>注 35</sup>あるいは「珍なる合唱」<sup>注 36</sup>と訳していますよ。本当に「さすらいの旋法」で間違いないんですね。

教授：ラテン語台本では前置詞が付いて in tono peregrino と奪格に変化しているが、主格では tonus peregrinus だ。音楽用語の「さすらいの旋法（トーマス・ペレグリヌス）」で間違いない。

**TITVS. Cantate iam iam canticum Domino Deo,  
Cuius potenti victor euasi manu,  
Vos ruminare filii verba omnia,  
Mens vestra ne discordet a verbis. Pia  
Iam turba! laudes Numinis nostri canet!**

*Titi familia cantat hymnum in tono peregrino.*

鳥代：「さすらいの旋法」は八つの教会旋法よりも古くからあるユダヤ系の旋法ですね。

<p><i>B: Cantate Domino laeta pueri cantica! Superba qui dispersit hostium agmina.</i></p> <p><i>S: Laudate iuvenes, virginesque in cymbalis, Sonantibusque canite carmina cytharis.</i></p> <p><i>T: Vos quoque senes, vos coniuges metra promite numinis in omnipotentis alto nomine!</i></p> <p><i>Ch: Frustra minatur hostis, opprimere haud potest; Nam fortitude nostra Deus excelsus est.</i></p> <p><i>Ch: Laus nostra, virtus nostra Domine! Solus es, Nostrae salutis tu Deus es immota spes.</i></p> <p><i>B: Saltare montes gestiunt, velut arietes, Saliuntque colles, velut oves, quis bonus es.</i></p> <p><i>S: Non Domine nobis tribue, sed tibi gloriam: Immensam adoret terra misericordiam.</i></p> <p><i>T: Nostri memor erat Dominus, auxilio fuit, Et huius hostis ante conspectum ruit.</i></p> <p><i>Ch: Adiutor et protector est sperantium, Custos, corona, praemium bellantium.</i></p> <p><i>Ch: Post bella clemens Domine das victoriam: Famulis perennem redde denique gloriam.</i></p>	<p>バス：主に向かって幸せなしもべの歌を歌え！ 敵を排除した彼らを誇りに</p> <p>ソプラノ：若者たち、乙女たち、シンバルで讃えよ リラを掻き鳴らして詩歌を歌え</p> <p>テノール：歌う年寄よ、あなた方は尺度となる夫婦 を連れ出す 全能の神の高き名の下に！</p> <p>合唱：敵の脅しは効かず、あなたは押さえつけられ ることがない；まことにいと高き神は我らの力。</p> <p>合唱：我らの讃歌、我らの主の力！ あなただけが、 我らの健康、変わらぬ希望。</p> <p>バス：子羊のように山は跳ね 羊のように小高い丘 が跳ぶ、あなたが寛大ゆえ。</p> <p>ソプラノ：主よ、栄光は我らに要らず、あなたが得 るもの；大地は無限の慈悲を崇める。</p> <p>テノール：我らの主は心配りよく、手を差し伸べる ことによる この敵は目の前で倒れた。</p> <p>合唱：助言者そして保護者が期待しているのは 戦いの番人、冠、報奨。</p> <p>合唱：戦いの後、寛大なる主よ、あなたは勝利を くださった 会衆は遂に永遠の栄光を与える。</p>
--	--

大輔：第 4 幕ではモルドヌスやヤクイヌスが謀って、キリシタンであることを種にティトゥスを讒訴します。皇帝は彼の忠誠を試すために、彼の 3 人の息子をとりえるんだ。

<p><b>第 4 幕第 2 場</b></p> <p>ゴモルドヌス、前出の人物たち</p>	
<p><b>ゴモルドヌス</b>：友よ！ 皇帝は私をここに派遣しました。あるいは彼の慈悲を伝えるために、あるいは悪魔の宣告をするために。今や時が来ました。あなたは何を祈り、いずれを選択しますか？</p>	
<p><b>ティトゥス</b>：死です。</p>	
<p><b>ゴモルドヌス</b>：（ああ、胸の痛みは震えて止まりません！）</p>	
<p><b>ティトゥス</b>：私はキリスト教徒です！ 知ってのとおり多くの人たちが、忠誠を誓う血のつながりで私をこう呼びます。</p>	
<p><b>シモン</b>：私もキリスト教徒です！</p>	
<p><b>ゴモルドヌス</b>：（無垢な子どもがそのような強さでまだ知らない神を公言するとは？ 年を重ねた者の優しい強さのようだ。ショーグンさま！ あなたの命令は、あまりにも私を苦しめます！） ティトゥスには嫌なお知らせですが、もう手遅れです；面目ありませんが、私はほとんど疼痛のために発言に耐えることができません。</p>	
<p><b>ティトゥス</b>：国が滅びたとでもいうのか？ 滅びる価値あるものに数え上げられているものの中でどれが第一のものになるのだろうか？</p>	
<p><b>ゴモルドヌス</b>：3 人のご子息にも運命を宣告するために、私に連れて来いとのご命令。</p>	
<p><b>マルティアリス</b>：兄弟よ！ 今から真に私の言うことが実現されるのですね？ ——私たちは見るでしょう！ 私たちには第一に受けることのできる冠が与えられるのです。</p>	
<p><b>クララ</b>：私はうれしい。祝福されるのは子供たち？ 主のご指示・怒りとしてあなたの仰ることを聞きましょう。ああ、どのように喜んで私はあなたに従いましょう、同志の方！</p>	
<p><b>シモン</b>：宣布者を気にしません！ 主のお助けでしょう？</p>	
<p><b>ティトゥス</b>：これが長子です！ ご覧下さい。親愛なるゴモルドヌス、どうぞ連れて行って下さい。子どもたちを亡霊に対峙させるよりむしろ、私が作った賛歌を歌いましょう。</p>	
<p><b>ゴモルドヌス</b>：おお、ティトゥス！ 私はそれを拒否できません。あなたの礼拝賛美歌のあいだ彼はあなたを恐れさせることは何もなく、人々は静かに傾聴するでしょう。</p>	
<p><b>ティトゥス</b>：よろしいでしょう。祈りましょう、月桂冠を主に。</p> <p style="text-align: center;">幸せな死のために讃歌を第 6 旋法で歌う。</p>	

大輔：二つ目の合唱が第 6 旋法で歌われます。これも台本で旋法が指定されているんですね。これで一つ目も音楽用語だったということに改めて納得だ。

<p><i>Sicut cervus ad fluente cursitat:</i>  <i>Sic amor Dei prectus meum incitat.</i>  <i>Nos sitis vivendi numen allicit:</i>  <i>O quando dies haec dulcis advenit?</i>  <i>Per noctes diesque congemiscimus,</i>  <i>Lacrimisque te dilecte! Quaerimus.</i>  <i>Insultant: Ubi est Deus tuus?</i>  <i>Monstra num queat quidquam favor suos.</i>  <i>His sitim meam Deus! Mali acunt:</i>  <i>Dum nomen tuum sublime proferunt.</i>  <i>Admirabilis domus Dei emicat,</i>  <i>Arque ad gaudium pectus meum excitat.</i>  <i>Quare tristis es mens nostra? Te eleva,</i>  <i>In Deoque spem nil mota colloca.</i>  <i>Quis sicut Deus noster, quis exstitit?</i>  <i>Cuncta qui manu potente condidit.</i>  <i>Mille si dolos tyrannus instruit:</i>  <i>Nil nocent, Dei quem dextra protegit.</i>  <i>Surge iam Deus! Nos fidus eripe,</i>  <i>Quis tuo redemisti usque sanguine.</i>  <i>Tu certantibus constantiam ingre,</i>  <i>Atque mortuos in astra suscipe.</i>  <i>Sit tibi Deus supreme! Gloria,</i>  <i>Qui potens eras cuncta ante saecula.</i></p>	<p>鹿が噴水の泉を求めるように、          神の愛を祈る人も同じ。          私たちは主の意思を求めて生活します。          ああ、甘きその日はいつ来るのですか?          呻き続けて、          私は泣いています、主よ！あなたを探しています。          侮辱：「あなたの神はどこにいますか？」          あなたの好意を見せてください！          私の心が、渇きが、主よ！間違いの尖鋭化によって          あなたの名前が高い限りそれは低められます。          驚異の名誉の館、          私の心の喜びが炎を注入します。          彼が私たちの心に来るかどうか、試してみましょう。          重大なトラブルが発生しないことを願っています。          私たちの願いの人は他にいますか？それは誰でしたか？          すべてが彼の御業です。          数多の暴力が私たちを痛めつけたとしても：          主が私たちを氣遣ってくださいれば、何も傷つきません。          主に向かって目を覚ませ！私たちは忠実にお助けします          私たちはあなたの血を交換することができるでしょう。          あなたは予め一貫性のために戦っています。          そして、星の中で死ぬことをよしとします。          偉大な主を崇めよ！ 栄光あれ。          あなたの力はかねてより強力なり。</p>
---	--

鳥代：第 5 幕では奸臣たちが皇帝の館を襲うのだけれど、そこでティトゥスが皇帝を救うため、息子たちが無事返され、ハッピーエンドとなるのね。

## 5. 悲劇《キリスト教徒のゆるぎなさ》の音楽の現存有無について

鳥代：現存している曲はどれどれなのでしょう。まとめておきたいわ。

犬輔：M・ハイドンの作品目録と言えばチャールズ・シャーマン／ドンリー・トーマスの『M・ハイドン年代順主題目録』<sup>注37</sup>ですが、悲劇《キリスト教徒のゆるぎなさ Pietas christiana》は見出しにありません。

教授：それではグローヴ音楽辞典を見てごらん。

犬輔：The New Grove 第 2 版 (2001) 「劇作品」の項に “Titus, der standhafte Christ (tragedy, trans. of Reichssiegel: Pietas christiana), before 31 Aug 1774, music lost” とあって、音楽は消失となっていますよ<sup>注38</sup>。

教授：2 曲の合唱曲に絞り込んで探すと、「ミサ固有文による単独曲」の項の 1770 年のところに “Cantate Domino, e, st142/kl III:44, c1770, related to ?Ballo, st141; Sicut cervus, st143/kl IIb:48, S, A, T, B, SATB, orch, c1770” とあるだろう<sup>注39</sup>。ここで st とはシャーマン／トーマスのカタログ番号のことで、MH 番号と同じだ。

鳥代：分かったわ。『M・ハイドン年代順主題目録』の MH141、MH142、MH143 のところを調べればいいのね。

犬輔：MH142 がオッフエルトリウム「カンターテ・ドミノ」で、MH143 がオッフエルトリウム「シクト・チェルヴス」となっています。そして両者とも pietas christiana がオリジナルであると説明されています（台本と歌詞が一致する）。ラテン語の楽譜とドイツ語の楽譜がヨーゼフ・リヒャルト・エストリンガーの筆写譜で残っているとのこと（両曲のドイツ語歌詞には M・ハイドンの筆跡が見られるそうだ）。でも、MH141 のバレエ曲は自筆譜があるとの記載はあるものの、MH142 との関連があるとは書かれていませんよ。

教授：そのバレエ曲がパントマイムの曲だろうと The New Grove は疑問符を付けているのだ。

犬輔：確かに MH141 は 2 部に分かれて、第 1 部は 15 曲および第 2 部は 18 曲の小品から成っているんですね（図 8）。

142  
OFFERTORIUM  
Cantate Domino

Allegro moderato (第 2 幕第 1 場の合唱)

オッフエルトリウム  
MH142 としての  
楽譜で残っている

143  
OFFERTORIUM  
Sicut cervus

Andante (第 4 幕第 2 場の合唱)

オッフエルトリウム  
MH143 としての  
楽譜で残っている

141  
BALLET

PARTE PRIMA (パントマイム第 1 部)  
Sinfonia. Allegro molto

Andante

Allegro

Adagio maestoso

Allegretto

Moderato

Prestissimo

Andantino

Allegro spiritoso

Allegro molto. Maggiore

Minore

Allegro molto. Maggiore da Capo

Andante

Allegro

交響曲 P6 第 1 楽章  
としても残っている

Andantino

Allegro assai

PARTE SECONDA (パントマイム第 2 部)  
Sinfonia. Allegro molto

Allegretto

Andantino

Moderato

Allegro

Allegro

Presto

Allegretto

Presto

Larghetto è cantabile

[No tempo]

Un poco Adagio

Presto. Maggiore

Minore

Presto. Maggiore da Capo

Coda

Menuetto

Trio

Andante

交響曲 P.12 第 1 楽章  
としても残っている

交響曲 P6 第 2 楽章  
としても残っている

交響曲 P6 第 3 楽章  
としても残っている

図 8 悲劇《キリスト教徒のゆるぎなき Pietas christiana》の音楽作品 (現存分)



鳥代：でもなぜ、MH141 のバレエ曲をパントマイムと位置付けることができるのですか。

教授：それを知るためにはヨハンナ・ゼーニグルの博士論文を読む必要がある。

鳥代：一般に公開されていない博士論文をどうやって手に入ればいいのでしょうか。

教授：大学名が分かる場合は直接依頼する方法もあるが、私の場合、ザルツブルクのみヒャエル・ハイドン協会に *pietas christiana* に関する論文はないかと問い合わせ、当該論文『ザルツブルク劇場生活へのヨハン・ミヒャエル・ハイドンの貢献』<sup>注40</sup>を送ってもらった。

鳥代：タイプ打ちの頃の博士論文なのですね。それによれば、「ブダペストのハンガリー国立セーチャーニ図書館には J・M・ハイドン直筆の二部構成になるパントマイムが保管されている。それは 1770.7.15/16 に出版されているとあるが、それ以上の詳細は特記されていない。この時期にハイドンが他の舞台作品に取り掛かっていたかどうか我々は知ることができない。それゆえここで我々がこのパントマイムを《*pietas christiana*》のものであろうと仮定することは全く妥当なことである。主題的にもそれはよく合致している。また楽器編成も通常の大学劇場の範囲を超えていない」とあるだけで、随分アバウトな推論よ。

教授：以上がこの劇の音楽として残っている曲のすべてだ。しかし、日本初演時のパントマイムは交響曲の楽譜を使っての部分上演であり、それ以外の楽章は演奏されなかった。全曲の演奏が俟たれる。その際、不足分をミヒャエルの他の作品で補ってもよいであろう<sup>注41</sup>。

犬輔：版ごとの相違を一覧表にしておこう。

表 1 *Pietas christiana* の版による相違

	ラテン語版 (1770)	ドイツ語版 (1774) <sup>注42</sup>	日本語上演版
タイトル	<i>Pietas christiana</i> キリスト教徒のゆるぎなさ	Titus, der standhafte Christ 不屈のキリスト教徒ティトス	ティトス右近殿
梗概	記載あり	同左	語り
献呈	ジギスメントへの献呈 (曲は紛失)	—	—
序曲	有無不明	同左	P.6 第 1 楽章
第 1 幕	宮廷 軍楽隊と共に退場 (曲は紛失)	朝廷の前庭 兵たちは戦場曲とともに並んで 退場 (曲は紛失)	城中の庭、右近邸
第 2 幕	寺院 “Cantate Domino 主に向かって 幸せなしもべの歌を歌え！” (MH142)	寺院 “Singtet ihr Männer dem Herrn さあ汝等ますらをたちよ、 主のみ前で朗らかに歓喜の歌を 歌へ” (MH142)	右近邸、将軍の間、 殿中 “Cantate Domino”
幕間	—	無言劇 第 1 部 (P.6 第 1 楽章を含む MH141)	P.6 第 2 楽章
第 3 幕	庭園	庭園	右近邸
第 4 幕	居室 “Sicut cervus 鹿が噴水の泉を 求めるように” (MH143)	座敷 “So wie der Hirsch läuft 男鹿が 息荒く、泉に駆け寄るごと” (MH143)	将軍の間、殿中 “Sicut cervus”
幕間	—	無言劇 第 2 部 (P.12 第 1 楽章、P.6 第 2,3 楽章 を含む MH141)	P.6 第 3 楽章
第 5 幕	広間	大広間	将軍の間、殿中
舞踊と演劇	無言劇 第 1 部・第 2 部 (P.6 第 1,2,3 楽章、P.12 第 1 楽章 を含む MH141)	—	—
終曲	—	有無不明	P.6 第 4 楽章
終業式	表彰状授与	表彰状授与	—

## 6. 悲劇《キリスト教徒のゆるぎなさ》の日本における評価

犬輔：この作品への日本における評価について順不同でいくつか紹介しておこう。海老澤敏は次のように述べている<sup>注43</sup>：「《ゆるぎなきキリスト教徒ティトス》はもともと 1770 年に大学で上演されたラテン語劇《キリストの憐み》[ママ]であったが、ドイツ語に翻訳され、このタイトルをもつことになったものである。ミヒャエルの作曲したものは部分的にしか現存していない。私たち日本人にとって、興味深く、また意味深いのは、舞台が日本で 1612 年 [ママ] という設定であろう。将軍 [ママ] ティトス・ウコンデン (!) が天皇ショーグ

ンサマ (!) に自分がキリスト教徒であると告白する [ママ] ところから始められるこの音楽劇は、18世紀のザルツブルクで日本が話題に取り上げられるという事態をあらわとしてくれるのである」。少しずつ内容がずれているのは伝聞で書かれているからだと思われる。1612年というもっともらしい年代設定も出典が不明だし、誰かが推定で言ったことが、ないまぜになって伝わったのではないだろうか。この文章は台本・楽譜の再発見から25年以上経って書かれているけど、まだ研究の黎明期のような状況だね。

鳥代：ヨーゼフ・クライナーはこう書いています<sup>注44</sup>。「モーツァルトが鑑賞した [ママ] といわれる《キリスト教の親孝行》では、ティトウスは將軍 [ママ] とされ、台本でも“將軍”ということばが使われている。鎖国から150年以上経った頃の台本にも、將軍は何度も登場する。その他にイエモンドヌス、あるいはモロドヌスといった日本語に近い人名が出てくる。ここでは“ティトウス・ウコンドヌス”と書いて高山右近がティトウスとなっている。内容は、寺子屋の話 [ママ] である」。もう少し原典に則して書いてほしいわね。

犬輔：属啓成は翻訳しているからさすがに正確だ<sup>注45</sup>。「私がこの劇を細かく読んでみて驚きを感じたのは、それが単に200年以上も前にヨーロッパの世界で上演されたということばかりではなく、日本に関する認識と記述がかなり正しいことである。物語そのものは決して史実に正確ではない。主人公ウコンドンも高山右近をそのままモデルにしたものでもないし、想定されるショーグンサマは秀吉と家康を一緒にしたところがあり、部分的には天皇とも混同した表現をしている。端的に言って、このような劇を上演した目的は日本の武士道には彼らの殉教精神に一致する共通点があって、それを利用して布教手段の一端としたと思われるのである」。面白い解釈だね。

鳥代：古瀬徳雄の論文の結論のところを見てみましょう<sup>注46</sup>。「本論は、プレ・ジャポニズムに先立つ、高山右近を題材とするイエズス会劇を中心とした演劇やオペラが真のジャポニズムに直結したのではないかとの視座に立ち開始した。資料を示し論じてきたように、イエズス会が取り上げた戦国武将たちの殉教や、親子愛は、布教、伝導、救済活動を展開する上で必要不可欠な題材に過ぎず、オペラやバレエといった様々なジャンルへの発展や継続性はもはや見当たらなかった。こうした結果から、16世紀の日本から題材を用いただけで自分たちの様式に作り変えただけである。主体がヨーロッパである。もし高山右近の譜面が残っていれば分析できるが、あくまで推察の域でしかいえないが、彼らが日本音楽を記述し、記録した上で日本音楽の音組織を解明し、原理を追求し、独自の美感にも基づく音楽語法を採択し、その技法でオペラ《右近》が完成されれば、真のジャポニズムになっていく。もし、M. Haydnの楽譜が残存し、例え発見されたとしても、題材は日本のものを使用したところから日本名が何らかの単語として付いたであろうが、そこに鳴らされる音楽、つまり音楽の本質は、あくまで西洋音楽にほかならない」。ここには「もし、M. Haydnの楽譜が残存し、例え発見されたとしても」と書かれているけれど、実際残っている楽譜の演奏を知っている私たちにとっても結論を修正する必要はないわね。

犬輔：デトレフ・シャウヴェッカーは説話的な報告例を紹介している<sup>注47</sup>。「実際の出来事として考えにくい話は《豊後のティトス》だ。いわばハッピーエンドで終わる〈トラジコメディ型〉の殉教ものである。1614年の年報で章の最後に特筆せられていた<sup>注48</sup>。主旨は、キリシタン弾圧中、キリシタン家臣であったティトスとその家族全員が相次いで殿によって酷い試練を受けるが棄教しない。その信仰の強さに感動した殿がかえってその信仰を皆に認める。この話を史実の記録とする考えもあるが、しかしその構造を見ると、つまり重要登場人物の人数（子供3人＋親）や試練の規則的繰り返し、そして極端なクライマックスなどを考えると、先述の《三人兄弟》と同じく説話的な様相を持つのではないかと思う。内容的にも、このような家族殉教型の話には信仰、忠、孝、それぞれの場面が見事に展開される。そして、話が終わる寸前に、——《三人兄弟》と同じく《豊後のティトス》も——見苦しい子供殺しを避けてハッピーエンドで終わらせることも文学的技法を考えさせる。類似の〈家庭殉教劇〉として、細川ガラシャ劇が取り上げられる。高山右近をテーマにする劇にもこの家庭的な場が編入されたものがある。学校演劇によく利用された型であったわけだ」。

教授：M・ハイドン再発見には日本からの要請が大いに貢献した。そして、劇の評価も単に日本を舞台にしたという興味本位で内容理解があやふやなものから、日本の研究者は、武士道と殉教精神の関連性、作劇上の分析評価をするまで行き着いた。しかし、音楽上の研究はジャポニズムを期待したが空振りにとどまった。

犬輔：聞きそびれたんですけど、モーツァルトはこの音楽劇の上演を見ていたんですって。

教授：1770年の上演時、モーツァルトは不在であった。1774年は確かにザルツブルクにいたが、見たという確証はない。だが、上演を知らなかったわけではない。

犬輔/鳥代：えっ、モーツァルトは知っていたのですか。どう知っていたのか教えてくださいよ。

教授：それは、またの機会にしよう。

- 注1: アウグスティヌスさんのブログから (Web)  
 注2: 列福式の実況記録は< <https://www.youtube.com/watch?v=d96PSEkMqHo> >  
 注3: カトリック中央協議会「福者ユスト高山右近殉教者の肖像画使用について」(Web)  
 注4: 洗礼名はポルトガル語で「正義の人、義の人」を意味するジュスト。ポルトガル語読みでは「ジュ」スト、ラテン語では「ユ」ストとなるが、右近は自身の花押として「重出」「寿須」「寿子」といった字を用いており、ジュストと発音していたと考えられる。Wikipedia: 高山右近  
 注5: Wikipedia: 高山右近  
 注6: 明石市市立文化博物館『明石の中世 II ——戦国時代の城館——』、発掘された明石の歴史展実行委員会 明石市、2016、図17～図41。  
 注7: 前掲『明石の中世 II』図12を参考にグーグルマップ (Web) 上に朱記  
 注8: グーグルマップ (Web) による  
 注9: 筆者撮影  
 注10: 前掲『明石の中世 II』図16を引用  
 注11: Hans Jancik: "Michael Haydn", Buchgemeinschaft Donauland, 1952, pp.105-108  
 注12: トーマス・インモース著/尾崎賢治編訳『変わらざる民族』南窓社、1972、82頁  
 注13: 古瀬徳雄『「ジャポニスムの諸相」—日本を題材としたイエズス会劇を中心に—』Journal 01 Kansai University of Social Welfare No. 2, 2000, 196頁  
 注14: 新山カリツキ富美子『ヨーロッパにおける日本殉教者劇』;『世界の日本研究』国際日本文化研究センター、2017、284-294頁所収の286頁には「18世紀に入り、ドラマの中心がウィーンからザルツブルクのベネディクト派のザンクト・ペーター修道院に移り、「イエズス会ドラマ」の代わりに、「ベネディクト会ドラマ」と称されるようになった」とあるが出典は不明。  
 注15: 以下前掲のインモース『変わらざる民族』81-96頁  
 注16: ヤンチークの伝記情報と一致している  
 注17: 属啓成『遍歴の音』音楽之友社、1972、29頁  
 注18: 『日本モーツァルト協会会報1975・4』Japanische Mozartgesellschaft, 1975.4.25  
 注19: 海老澤敏 監修・執筆『モーツァルト住家復元完成記念 ザルツブルクのモーツァルト』大丸、1996  
 注20: Pirmin Lindner: Professbuch der Benediktiner-abtei St. Peter in Salzburg (1419-1856), Buchdruckerei Ringschwendtner & Rathmayr in Salzburg, 1906, p.170  
 注21: 関西大学『独逸文学』第48号、2004、192頁  
 注22: Pietas Christiana: tragoedia, 1800  
 注23: Clemens Alois Baader: Lexikon verstorbenen baierischer Schriftsteller des achtzehnten und neunzehnten Jahrhunderts: R · Z. 2, 2, Jenisch und Stage, 1825, p.11  
 注24: 『悲劇喜劇』29巻2号(304)、早川書房、1976、92-98頁、107-137頁  
 注25: 前掲の属啓成『遍歴の音』25頁  
 注26: 関西大学『独逸文学』第48号、2004、191-215頁&関西大学『独逸文学』第49号、2005、287-316頁。  
 注27: ティトス右近 < <https://www.youtube.com/watch?v=KkPYmDmFXNU&feature=youtu.be> >  
 注28: Johanna Senigl: Johann Michael Haydn: Kompositionen für Salzburger Bühnen; Ein erster Überblick, MJB1987-88, pp.85-89  
 注29: Iulian Boldea ed.: Memory, Identity and Intercultural Communication, Edizioni Nuova Cultura, 2012, p.393  
 注30: 前掲のインモース『変わらざる民族』85頁では台本作者を「マリアン・ヴィマルと推定される」としていた。  
 注31: Wikipedia: Iuvavum (ドイツ語サイト)  
 注32: コルネリウス・ハザート (Cornelius Hazart, 1617-1690) はオランダ出身のイエズス会神父。Cornelius Hazart: Kerckelycke historie vande gheheel wereld (全世界の教会史) 第1巻, Michiel Cnobbaert, 1682 (初版は1667) では第V部 第xx章 (110頁) は「カイザー・ダイフサマは亡くなり、彼の息子が新たな敵意を持って帝国で成功した」であり、ドイツ語訳の Cornelius Hazart (Mathias Soutermans transl.): Kirchen-Geschichte Das ist: Catholisches Christenthum durch die gantze Welt (教会史 全世界に広まるカトリック教会の歴史) 第1巻, In Verlegung Leopold Voigt einer Löblichen Universität Buchdrucker, 1694 (初版は1678) では第V部 第xx章 (412頁) は「伏見、大坂とミヤコへのキリスト教迫害」であって、相互に章が一つづれている。ライヒスジューゲルは後者を参照したものと思われる。その内容は1614年の徳川家康によるキリシタン国外追放令、有馬での騒動、三人兄弟の話などである。Xogunsama や Titus という名前は出てくるが右近への言及はない。恐らく右近の物語は既に常識になっており、劇のエピソードを渉猟する文献としてのみ活用したものであろう。  
 注33: 高山右近研究室のブログ『中世のヨーロッパで「高山右近」を主人公にした劇上演!』2012.8.24 (Web)  
 注34: Wikipedia: ドミヌス (日本語サイト)  
 注35: 前掲『悲劇喜劇』111頁  
 注36: 前掲『独逸文学』第48号、206頁  
 注37: Charles H. Sherman & T. Donley Thomas: Johann Michael Haydn (1737-1806), a Chronological Thematic Catalogue of His Works, Pendragon Press, 1993  
 注38: Stanley Sadie ed.: The New Grove Dictionary of Music and Musicians, second edition, Macmillan Publishers Limited, 2001, p.277  
 注39: 前掲 The New Grove, p.275  
 注40: Johanna Maria Senigl: Johann Michael Haydns Beiträge zum Salzburger Theaterleben (dissertation, University of Salzburg, 1987).  
 注41: 前掲の新山『ヨーロッパにおける日本殉教者劇』288-289頁には「音楽場面はこの『「気丈な貴婦人」の』残されている写本のなかでも、一つ一つの楽譜が書かれておらず、ただ示唆のみのところもある、それはこの時代の劇音楽の習慣で、前奏曲、間奏曲などを、既成の自作曲、または同時代の作曲者の曲を使用することを表していることで明らかである」との見解が述べられている。  
 注42: 前掲『独逸文学』の訳による  
 注43: 前掲『ザルツブルクのモーツァルト』52頁  
 注44: ヨーゼフ・クライナー『モーツァルトと日本』; 星野勉編『外から見た<日本文化>』法政大学出版局、2008、61-82頁所収  
 注45: 前掲『悲劇喜劇』95頁  
 注46: 古瀬徳雄『「ジャポニスムの諸相」—日本を題材としたイエズス会劇を中心に—』Journal of Kansai University of Social Welfare No. 2, 2000, 189-219、特に216頁  
 注47: デトレフ・シャウヴェッカー『イエズス会文獻における公と私』; 猪木武徳、マルクス・リュッターマン編『近代日本の公と私、官と民』NTT出版、2014、62頁  
 注48: イエズス会年報に、同時代の出来事を完成度高い物語で報告していることは面白い。《豊後のティトス Titus von Bungo》は当初インモースが属啓成に調査を依頼した作品であり、高山右近劇と混同されていた。主役は友友宗麟であるとされるが、結局台本は発見されていない。前掲のインモース『変わらざる民族』85-86頁、前掲の属啓成『遍歴の音』19-25頁参照。



図9 ハザート『教会史 全世界に広まるカトリック教会の歴史』